くる。そして昨秋は京の地でこの秋の風物を味わっていた我が身を想起するに、一層の望郷の念と現状への悲惨さが拡張されてしまう心情を詠う。

141 跛牂重有縶　跛牂　重ねて縶有り
142 瘡雀更加攣　瘡雀　更に攣を加ふ
143 強望垣牆外　強いて望む　垣牆の外
144 偸行戸牖前　偸かに行く　戸牖の前
145 山看遙縹緑　山には遥かにして漂緑なるを看る
146 水憶遠潺湲　水は遠くして潺湲たるを憶ふ
147 俄頃羸身健　俄頃羸身健やかに
148 等閑残命延　等閑残命延ぶ
149 形馳魂怳怳　形馳せて魂怳々たり
150 目想涕漣漣　目想いて涕漣々たり

【十六段】

この十句では、京都のことを思い出し、官途についてからの半生を振り返り、鑽堅研微し祖業を受け継いだ儒家として、また祖業は「儒林」で人々の間に高くそびえていると誇っている。讃岐の国守としても立派に治め功績を挙げたとの自負を述べる。